

釈道安の弥勒信仰

——弥勒上生経訳出以前の兜率願生——

中国仏教の初期において仏教の正しい理解と受容に尽したのが釈道安である。当然のことながら道安の仏教学はその時代の課題を負うものであり、戒律・禅観・般若学をはじめ経典の翻訳論など極めて広範に亘り、かつそれらはいずれも後世の中国仏教の基礎を為すものであった。それ故、道安に関しては既に多くの研究成果が提出されているが、彼の弥勒信仰に限ってみるとき、未だ十分に論究されているとは言えないであろう。また、中国に於ける弥勒思想の研究の上でも兜率往生を鼓吹する『観弥勒菩薩上生兜率天経』（『弥勒上生経』）が伝訳される以前の兜率上生信仰の実態は明らかにになっていない。そこで是非とも釈道安の弥勒信仰について十分な検討を加えねばならない。

木 村 宣 彰

弥勒信仰には弥勒菩薩の住処たる兜率天への往生を願う上生信仰と弥勒の下生成道に値遇することを願う下生信仰とを兼備する。もとより両信仰は全く別個で隔絶した信仰という訳ではないが、それぞれ明確な相違を示している。例えば、前者は「往生思想」がその信仰の中核をなしており、兜率天への往生によってただ今「現在」の救済を願うものであるのに対して、後者は弥勒菩薩の「本願思想」が中心で、将来の弥勒下生を待つて化益にあずかるのであるから「未来」の救済を期待するものである。

その中、兜率天への往生を願う信仰は、多くの弥勒経典の中で特に沮渠京声訳『弥勒上生経』のみに於て強調するところである。一方、下生信仰は『弥勒下生経』『弥勒成

仏経』などの弥勒經典にその所説を認めることが出来るが、そこでは兜率天への往生や來迎について全く言及していない^①。実に兜率往生の信仰は『弥勒上生経』に基づくものであり、現に歴史的事実として沮渠京声が高昌郡でこの経を訳出し、京都（建康）に齎らすに及んで極めて広く隆盛するに至った。ところがこの『弥勒上生経』の伝訳より既に一世紀も以前に兜率天往生の信仰が認められる。それは前述の西晋道安の弥勒信仰である。即ち、道安が弥勒像の前で誓いを立てて兜率天の弥勒のもとに往生せんことを願ったことは後に詳述するように梁慧皎の『高僧伝』等に記録している。この道安の立誓をもって中国仏教史上における最初の弥勒信仰と考えられているのである。そこで道安の兜率天弥勒の信仰が事実とすれば、道安は『弥勒上生経』訳出以前に如何にしてその信仰を有するに到ったのであるうか。その信仰の実態を明らかにすることは、中国の仏教思想殊に弥勒信仰史を解明する上で重要な課題となるであろう。

一 道安の弥勒信仰とその同志

道安（三一四～八五）の生涯の事蹟を知る資料としては僧祐の『出三蔵記集』巻十五と慧皎の『高僧伝』巻五（義解

篇二）に収載される「釈道安伝」が中心となる。^② これと併せて重要な資料となるのは、僧祐の弟子宝唱の『名僧伝』第五の「偽秦長安官寺釈道安伝」であるが、この『名僧伝』は既に散佚して伝わらない。ところが幸いにもわが笠置の宗性の『名僧伝抄』の中に道安の伝を抄写している。これらの道安伝の資料の中で当該の課題である弥勒信仰について言及するものは『名僧伝抄』と『高僧伝』とである。僧祐が書いた道安の伝記（『出三蔵記集』）には弥勒崇拜や兜率願生の事実について全く触れてはいない。慧皎は『高僧伝』を撰述する際に僧祐の『出三蔵記集』を主たる資料として、それに他の資料から蒐集した事蹟を夫々の該当箇所に挿入したものと考えられる。それ故、時としてその記述に年代的な錯乱を来たしている場合もある。道安の弥勒信仰に関する記載も『出三蔵記集』では何ら言及していないのであるから慧皎は他の資料からそれを補足したもののようである。それについて慧皎は何ら述べていないが、その中の一は先行資料である宝唱の『名僧伝』であること明らかである。現に『高僧伝』中の兜率往生に関する記載は、宗性が抄写した『名僧伝抄』の記述と甚だ類似するものである。

まず『高僧伝』の道安晩年の記事を援引しながら検討を

はじめたいと思う。道安はその晩年に前秦王符堅（在位三五七〜八五）の庇護の下に長安城に於いて外国沙門僧伽提婆・曇摩難提・僧伽跋澄らの訳経事業に携わり、竺法和とともに音字を銓定し、文旨を詳覈することに努めていたが、やがて符堅の建元二十一年（三八五）二月八日を以て歿し、長安五級寺に葬られた。僧祐の『出三藏記集』には、この道安晩年の記事を甚だ簡略に、

時に〔道〕安、同じく長安城内に在り、偽の建元二十一年二月八日を以て齋を畢り、疾無くして卒す。^④

とのみ記している。これに対して慧皎は『高僧伝』に次の様に記している。

〔道〕安、毎に弟子法遇等と弥勒の前に於て誓を立て、兜率に生ぜんと願う。後、秦の建元二十一年正月二十七日に至り、忽ち異僧あり。形、甚だ庸陋なり、寺に來りて寄宿す。寺房は既に迄く、之を講堂に処く。時に維那、直殿し、夜にこの僧の窓隙より出入するを見、遽かに以て〔道〕安に白す。〔道〕安、驚起し礼訊して來意を問う。答えて云く「相く為に來る」と。

〔道〕安、曰く「自ら惟るに罪深く、詎ぞ度脱すべけん」と。彼答えて云く「甚だ度すべきのみ。然るに須臾に聖僧を浴せば、情願必ず果さん」と。具さに浴法

を示す。

〔道〕安、來生所往の処を請問す。彼乃ち手を以て天の西北を虚撥す。即ち、雲の開くを見、備さに兜率妙勝の報を覩る。爾の夕、大衆數十人悉く皆同じく見る。かくして、その年（三八五）の二月八日に至って「吾、當に去るべし」と衆に告げ、齋を畢り、疾無くして卒した。

先述の如く、かかる弥勒に関する記事は『出三藏記集』には全く見られないが、宝唱の『名僧伝』には「□□嘗与弟子法遇等以人、於弥勒像前立誓願同生兜率」と述べ、続けて建元二十一年正月二十七日の異僧の出現とそれとの問答を記している。その趣旨は先の『高僧伝』と等しい。異僧の神異は暫く置くとして道安が若干の門下と共に弥勒像の前で兜率願生を誓ったという同志について『高僧伝』は「弟子法遇等」と為しているところを『名僧伝』では「八人」の誤写と考えられる。この「以人」は恐らく「八人」の誤写と考えられる。何故ならば『高僧伝』巻五の曇戒伝によつて知ることが出来る。道安の弟子曇戒は、疾病の為に常に弥勒の名を口誦し、未だ曾て懈怠することはない。曇戒の弟子智生が「何ぞ安養に生ぜんと願わずして、専ら弥勒〔の名〕を呼ぶや」と問うたのに対して、曇戒は、

吾、「道安」和上等八人とともに、同じく兜率に生ぜんと願えり。和上及び道願等、皆已に往生せり。吾、未だ去るを得ず。是の故に願あるのみ。

と答えると、光がその身体を照らし、容貌は悦びにみち、俄かに遷化した。そこで師の道安の墓の右に葬られた。曇戒の卒年について『高僧伝』には何ら記してはいないが、『名僧伝抄』(感通苦節篇)には隆安年中(三九七~四〇一)に疾病のため七十歳にて卒したという。この曇戒(惠精)の伝記と、先の道安の伝記とを併せ考えるとき、道安が曾て兜率願生を誓い合った同志及び立誓の時期等についてそこで次に道安の信仰の同志及び立誓の時期等について考察することとする。

道安とともに兜率往生を誓った信仰の同志の中、既に知られる者は、先の道安伝や曇戒伝にその名のある法遇(三七七~)、曇戒(惠精)、道頭の道安門下三名である。ところが『名僧伝抄』や『高僧伝』の法遇(曇遇・道遇)伝には、彼と弥勒信仰との関りについては何ら言及するところはない。また、曇戒伝の中に道安の同志としてその名の挙げられた道頭については今日その伝記を全く知ることが出来ない。

道安の同志としては門下三名の外に、道安の友人竺僧輔

の名が伝わっている。『高僧伝』巻五に彼の伝記があり、次のように伝えている。

西晋の饑乱に値い、「竺僧」輔、釈道安等とともに漢沢に隠れ、研精弁析して幽微を洞尽す。後に荊州の上明寺に憩い、单蔬自節し、礼懺を翹懇して、兜率に生れ慈氏を仰瞻せんと誓う。

竺僧輔は法遇らと異り、道安の門下弟子というわけではなく、文字通り同学の土であったと考えられる。慧皎の『高僧伝』によると道安の立誓の同志として右の四名以上にはそれを検索することが出来ない。だが『名僧伝抄』中の道安伝に次のような注目すべき記載がある。

〔道〕安、嘗て嘉及び弟子法遇等とともに弥勒仏の前に於て共に誓願を立て、兜率に生ぜん願う。

これによれば、先の法遇等の外に道安とともに立誓した同志に「嘉」と称する人物が居たことになる。右の文から見て「嘉」は道安の弟子と云うわけではない。この「嘉」とは『出三藏記集』や『高僧伝』の道安伝にその名のある王嘉(字子年)のことである。王嘉は「五穀を食はず、清虚服氣す。人咸く宗めて之に事い、往て善悪を問うに、〔王〕嘉、随いて応答す」と称される隠士で、符堅から道安とともに非常な尊信を得ていた。道安との交友について

は『出三藏記集』『高僧伝』の道安伝に詳しいが、彼の弥勒信仰については何ら語っていない。しかし、以上の考察から道安の兜率願生の同志八名は僧俗に互るものであり、現在のところ竺僧輔、法遇、曇戒、道頭と隠士王嘉との五名を数えることが出来る。

王嘉が道安とともに兜率願生を誓ったとすれば、かの高平の郗超(三三五―三七七)も、或いは道安の弥勒信仰の影響を受けた人物と考えられる。道安が慧遠ら四、五百名の門弟と襄陽に落ち着いたのは興寧三年(三六五、道安五十三歳)頃であった。郗超は襄陽に在って多くの弟子を統率する道安に随喜して米千斛を送り親交を結んでいる^⑭。この郗超も亦弥勒信仰を有していた。

晋に譙国戴逵(字安道)という著名な仏像作家が居り、無量寿仏と挟持菩薩の像を作らんとして心を委ね慮を積むこと三年にして完成したので山陰の靈宝寺に安置した。この像を觀た道俗は皆、菩提心を發したという。郗超はこれを聞き、自ら礼觀し、

若使有常復觀聖顏、如其無常願會弥勒^⑮と誓願した。彼は無量寿仏を礼拝しながら「如し其れ無常なれば、願くば弥勒に會ん」と誓い、死後に兜率天の弥勒の許に生まれたいと願っているのである。郗超は支遁や法

曠らに師事した奉仏の士で、道安の先輩であるが、襄陽時代の道安に対し尊信の念を以て交遊している。郗超が弥勒信仰を有するに至った経緯や道安との信仰上の関りなどについては、未だ不明の点が多いが、若し道安の弥勒信仰が晩年のことではなく、既に襄陽時代のことであるとすれば、或は道安の信仰が郗超に幾分かの影響を与えた可能性が推測されるのである。

二 襄陽時代の道安と弥勒信仰

道安の事蹟を年代順に正確に決定することは容易なことではない。鄴に於いて西域僧仏図澄に師事して以後、襄陽に定住するまでの間の道安の動静に関して慧皎の『高僧伝』^⑯の記述に年代的な錯乱の存することは既に指摘されている。殊に仏図澄の死後、安住修道の地として襄陽に滞在するまで華北を転々と流浪していた時代の道安の住所を正確に確認することは困難である。だが、道安の生涯を、その思想的展開に従って四時期に大別して考察することは可能であり、又当を得ている。その第一期は、出生から仏図澄に師事し、鄴に在って修学につとめた時代である。第二期は師の仏図澄の下を離れ河北の諸山を流浪しながら禅觀の研鑽に尽した時期で、第三期は安住の修学地として襄陽

に滞在し、般若経の研究に専念した時期、そして第四期は符堅によって襄陽が陥落し、長安に迎えられて符堅の下で訳経の監修に没頭していた時期である。

道安は鄴の仏図澄に何年間師事したか不明であるが、仏図澄の死(三四八)より数年前に鄴を発つて以来、河北地方の太行山脈の漢沢や飛龍山など戦乱を避けながら修禪につとめた。やがて興寧三年(三六五)頃に襄陽に滞在することになるが、のちに襄陽が符秦によって攻略され習鑿齒らとともに長安に迎えられるまでの十五年間、彼は襄陽を離れることなく専ら般若経の研究にあたった。道安が河北地方を転々としていた時期には、安世高沢の『安般守意経』などに由来する般若の研鑽を行っていたが、襄陽に移つて以降、一転して般若経の講讀に展じている。この道安の思想的展開についてはすでに横超慧日博士によって解明されている。^⑧要するに道安は鄴に於いて仏図澄や帛法巨ら西域出身の沙門から禅觀の重要性を教えられ、沙門として禅觀の実践につとめたが、江南に移り東晋の般若経研究の隆盛に接することにより、般若経の研究が禅觀の根源を究める所以でもあることを知り、ついに般若経の講讀に没頭することとなったのである。

それでは、道安はその生涯の経歴の中で何時頃から弥勒

信仰を得るに至ったのであろうか。かつて鎌田茂雄博士は「道安がその晩年において弥勒を信仰した」と論じられた^⑨が、果して道安の弥勒信仰は晩年、長安に移つてはじめて得たものであろうか。恐らく否である。何故ならば、道安とともに兜率願生を誓った同志は、道安が襄陽を去つて長安に移つたとき、道安と離れ、或は荊州上明寺に、或は江陵長沙寺などに移り、それぞれ別々に教化活動を行っていたからである。道安伝に立誓の同志としてその名を挙げられた法遇が、道安と過したのは襄陽時代のことであった。『高僧伝』巻五の法遇伝に、

安公と相値い、忽然として信伏し、遂に簪を投げて道^⑩を許し、「道」安に事えて師と為す。

と道安に師事したことを述べている。その年時や場所は不明であるが、恐らく道安の襄陽滞在以前のことである。道安の襄陽時代以前の弟子である法遇は、道安が長安に移るに及び、師と分かれて江南に東下している。即ち、

後、襄陽、寇を被るや「法」遇すなわち地を避けて東下し、江陵の長沙寺に止り、衆経を講説す。業を受け^⑪る者四百余人なり。

と伝えられる。法遇が襄陽を去つた年時について『名僧伝抄』は、晋の太元二年(三七七)に襄陽が囲るるや曇徴・曇

翼・恵遠等と与に下って江陵の長沙寺に集合したという。これによれば道安の門弟は襄陽陥落の直前に襄陽の檀溪寺を離れ、江陵の長沙寺に落ち合う約束だったようである。その後、法遇は長沙寺に教化活動を行っており、師の道安とは異域に隔在し、そのまま江陵に卒しているのである。従って、道安と法遇とが弥勒像の前で立誓したのは道安の襄陽滞在時代以外には考えられないのである。

また、竺僧輔は郷の人であるが、竺僧輔についても亦「[僧]輔、釈道安等と与に漢沢に隠れ、研精弁析し、幽微を洞尽す」と云われるから道安の漢沢時代からの同学であるが、やはり道安が長安に去って後、その活動の拠点を荊州の上明寺に移している。^②

次に曇戒について見てみたい。^③曇戒は于法道の『放光経』の講義を聞き仏門に入り、ついで「安公に伏事して師と為す」というが、『高僧伝』はその年時を記していない。のち疾篤く常に弥勒仏の名を誦して輟めず、七十歳で遷化した。『名僧伝抄』は道安の下に投じた年を十九のことと為し、隆安年中（三九七〜四〇一）に七十歳で歿したという。若し卒年が隆安の末年であったとすれば、曇戒が道安に師事した年十九は、晋の永和六年（三五〇）であり、道安三十九歳で、冉閔の乱を避けて王屋女机山に入った歳である。

その後、先述の道安門下と同じように師と離れて長沙寺に住することとなった。

この様に見てくると道安と与に弥勒像の前で兜率天への願生を誓った同志は、いずれも道安が難をのがれ漢沢に隠れた頃に師事し、襄陽時代をともに過し、東晋太元四年（三七九）に道安が長安に入って以降は、それぞれ異域に在り一堂に会することはなかったのである。従って道安が同志とともに弥勒像の前に立誓したのは必ずや襄陽時代のことであったと考えられる。道安らが立誓した弥勒像を特定することはもとより不可能であるが、或は襄陽檀溪寺の完成に際して、長安の秦王符堅から送られた結珠の弥勒像であったかもしれない。^④

いずれにせよ道安の弥勒信仰は、従来より言われるように道安の晩年の信仰というわけではなく、既に襄陽時代に、その信仰を得ていたことは確かである。

三 道安の弥勒信仰の目的及び動機

道安の弥勒信仰がすでに襄陽滞在の時代に始まることは明らかとなった。而らばその信仰の動機や具体的な修行行法について考察したい。

慧皎の伝えるところによれば、「相く為に来る」と云う

弥勒の聖応たる異僧に対して、道安は「自ら惟うに罪深し、詎ぞ度脱すべきや」と問訊している。これによれば道安の弥勒信仰の動機は、まさに自己の罪惡観に根差しており、罪惡の現実からの出離度脱にあったようであるが、果してそうであろうか。

そこで次に直接に道安の遺文について検討しよう。先ず『出三藏記集』卷十に収める『婆須蜜集経序』^⑧について考察することとする。この序文は未詳作者というが、その内容等から推して確かに道安の作である。この序文に従えば、釈迦文に従ってこの世に降生した婆須蜜は当来仏の弥勒（賢劫第五仏）に次継して作仏し師子如来（賢劫第六仏）と成る菩薩である。この婆須蜜菩薩はやがて兜率天の弥勒路の所へ升り、将来弥勒仏となる弥勒路、光炎如来（賢劫第七仏）となる弥勒路戸利、柔仁仏（賢劫第八仏）となる僧伽羅刹とともに四大士が一堂に集まる。そこで、権智を対揚して、賢聖黙然たり。洋洋として盈つるのみ、亦楽しからずや。

と、弥勒菩薩の住処たる兜率天の光景を歎仰している。この道安の遺文から彼の仏国土や仏語に対する歎仰の念をよみとることが出来るが、そこには『高僧伝』に云うような自己の罪惡観というような心情は何ら語られてはいない。

道安をして弥勒信仰に誘った直接の動機は一体何であったかと言え、それは彼にとっては避て通ることの出来ない仏教学上の疑義の解決、即ち決疑のためであったと考えられる。入信の動機としてはいささか不自然な感もあるが、道安の弟子僧叡の次の言葉が何よりもそれを傍証している。

此の土の先に出せし諸経は、識神性空を明言する処少なく、存神之文はその処甚だ多し。中・百二論の文は未だ此に及ばず。又、通鑑無し。誰かともに之を正さん。先匠〔道安〕、章を頼めて遐かに慨き、決言を弥勒に思ふ所以は、良に此に在るなり。^⑨

襄陽において般若経の研究に専念していた僧叡の先匠たる道安の慨歎の音が聞えてくるようである。僧叡が後に師事することになった鳩摩羅什によって『百論』が訳出されたのは道安の歿後十八年のことであり、般若大乘の通鑑たる『大智度論』は同じく十九年後、『中論』は二十三年後のことであった。この僧叡の言葉と平仄を合せるように道安自ら次のように述べている。

昔、漢陰（襄陽）に在ること十有五載、放光経を講ずること歳に常に再遍なりき。（中略）然るに毎に句に滞り、首尾隠没するに至って卷を積きて深思し、護公・又羅等に見えざるを恨みたり。^⑩

毎年に二回の『放光般若経』の講義を十余年続けてもなお句に滞り、文の通じ難い所があり、首尾一貫しなかった。そこで『般若経』の訳者竺法護や無叉羅(竺叔蘭)に会って直接に疑義をただすことの出来ぬのを悲しんでいる。先の僧叡の言葉と一致する。当時、般若経研究の第一人者であり、教団を引率する指導者・道安としては慨歎が一人であつたろう。門弟は疑義があれば師の道安にたずねればよいが、師たる道安には当時尋ねる師匠も、よるべき通鑑も無かつた。その為、道安には殊の外、翻訳三蔵に対する尊信の念が強い。多くの禅觀經典を訳出した安世高に対して「若し面裏に及ばば聖に見るに異ならず」とまで称したという。翻訳者に面承して仏語の玄趣を尋ねたいという強い願望は、それが叶わぬとなればなるほど自己が仏滅後に生まれて、仏世に値遇することが出来ずに辺国に処ることを「遐かに慨く」こととなるのである。

この末世・辺国という慨歎の気持ちこそ常に道安の胸に去来していた。仏教学上の疑義に遭遇する毎にこの感情はより一層強くなるのであつた。

道安の遺文『十二門経序』には、今は仏滅後であり「経蔵存すと雖も、淵言測り難し」と歎じつつ、次のように述べている。

〔道〕安、宿し不敏にして、生まれて仏〔滅〕後に値い、又、異国に処り、楷範は多く闕き、古烈を仰希すれども、滞りて未だ究す。寤寐、憂悸して、首を疾むが若き有り。

また『道地経序』にも道安は同じ歎きを吐露している。天竺の聖邦は、道祖にして遠遠なれば、幽見の碩儒、来りて周く化するもの少なし。先哲は既に逝き、来聖は未だ至らず、進退狼跋し、咨嗟涕淚す。

と述べている。この外にも道安の遺文中に「世は仏に値わず、又、辺国に処る」ことを歎く言葉が散見する。

この辺国意識は、天竺聖邦の感情となり、やがて将来仏の住処たる兜率天への願生の信仰となる。また、末世(仏滅後)意識は、西域渡来の翻訳三蔵ら古烈への尊信となり、更には「来聖は未だ至らず」という当来仏弥勒の信仰となる。

河北地方を流浪しながら安世高訳出の禅觀經典の研究に専念していた時代に芽ばえた末世・辺国の意識は、やがて襄陽に定住し『放光経』を講讚する頃になり兜率天弥勒の信仰として熟するに到ったものと考えて間違いないであろう。

現に道安伝の中に次のような逸話を伝えている。

〔道〕安、常に諸經を注して理に合せざるを恐る。乃ち誓いて曰く「若し説く所遠理に堪えずば、願くば瑞相を見せ」と。乃ち夢に胡道人の頭白眉長なるを見る。安に語りて云く「君の注する所の經は、殊に道理に合す(云々)」と。

頭白眉長の胡道人は、のちに賓頭盧であることが分ったと云うが、道安が自己の問題の決疑を史上の人物以上のものに求めていたようである。

要するに道安の弥勒信仰は、法門上の疑義の解決から発したもので、弥勒菩薩に見えることよって決疑を得んとするところに信仰の動機があったと考えられる。また、道安の末世・辺国の意識がその信仰を一層助長しているのである。

四 道安の弥勒念仏

信仰にはそれにとまなう実践行軌が存する。道安の弥勒信仰に於いては実際に如何なる行法を實踐したのであろうか。先ず、その考察の手掛りとして道安とともに弥勒像の前で立誓した同志の行法について見ることにする。

かの竺僧輔は「礼懺を翹懃して、兜率に生れ、慈氏に仰瞻せんと誓った」というから、彼は礼拝、懺悔を双修して

いたようである。また、曇戒は「常に弥勒仏の名を誦して口を輟めず」と云われるように礼仏と称名とを實踐していたようである。法遇や道頭等についてはその行法の実態を知ることは出来ない。

その事例は決して多い訳ではないが、道安の弥勒信仰の同志の行法としては礼拝・懺悔・称名などを修していたと考えられるのである。しからば道安も亦、これらの行法を實踐していたのであろうか。

しかし、ここに言うところの礼拝・懺悔・称名などはいずれも沮渠京声訳の『弥勒上生經』に説く兜率往生の行法に一致するものである。これは恐らく『高僧伝』の撰者慧皎が、弥勒信仰者の伝記を記す際に『弥勒上生經』を念頭に置き、その影響を受けつつ記述したものであろう。『高僧伝』の道安伝に於いてもその例を認めることが出来る。

宝唱が『名僧伝』に異僧が出現し「天の西北の端を仰撥し、重霄を既に褰め、天宮の伎楽を見せしむ」と記しているところの「天宮の伎楽」を、慧皎は殊更に「兜率妙勝の報」と記している。これは明らかに『弥勒上生經』の經文に從った表現である。『弥勒上生經』訳出以前の弥勒信仰を後に伝説された經典に説かれ行法によって規定することは出来ないのである。

しからば道安の弥勒信仰は、いかなる行法によって根拠を与えられていたのであるか。それは直接に道安の言葉に依って考察しなければならない。道安は『婆須蜜集経序』の中で婆須蜜の兜率上生について

三昧定に入り、彈指の頃の如きに神は兜術〔天〕の弥勒路に升れり。^⑤

と述べている。ここに道安自身の弥勒信仰の行業が如実に示されている。定中において弥勒に見え、聞法する。法門の疑義解決も、結局は見仏聞法によって得られるものである。これは弥勒念仏と称すべきものである。念仏とは本来、禅定の一種である。

実際に入定して兜率天に昇り、弥勒菩薩に見え、疑いを諮したり、或は菩薩戒を受けたという当時の具体例がしばしば見られる。例えば『高僧伝』卷三の智嚴伝に、

〔智嚴〕入道して具足を受けるも、常に戒を獲ざるを疑い、毎に以て懼と為し、積年、禅観して而も自ら了する能はず。遂に更に海に汎い、重ねて天竺に到りて諸の明達に諮る。羅漢比丘に値い、具さに事を以て羅漢に問うに、敢て判決せず乃ち〔智〕嚴の為に、入定して兜率宮に往きて弥勒に諮る。弥勒、答えて云く、戒を得と。^⑥

と記している。智嚴は西涼州の出身で柁園寺の僧であるが、彼は戒律上の疑問を自ら禅定に入って決しようとしたが果せず、天竺の羅漢比丘にたずねたが、比丘も亦自ら決することなく定に入って兜率天に昇り、弥勒菩薩に見えてその判決を得たというのである。この兜率上生は入定によるものであり、まさにその目的は決疑にあった。

また、『高僧伝』卷十一の慧覽の伝にも亦同様な事例を認めることが出来る。

闕竇に於いて達摩比丘に従い、禅要を諳受す。達摩、曾て入定して兜率天に往き、弥勒に従い菩薩戒を受く、後に戒法を以て覽に授く。^⑦

これらの外にも覺賢や僧景、道法らも亦、入定して兜率天に昇って弥勒菩薩に見えた。彼らの兜率上生は、沮渠京声によって『弥勒上生経』が伝訳される以前のことであり、『弥勒上生経』によるものでないことは言うまでもない。これらはいずれも「入定見弥勒」の弥勒念仏であり、上昇請問を目的としている。

〔道安〕が、『婆須蜜集経序』に自ら述べているように、彼の弥勒念仏も右の諸例と同じく入定によって兜率天に昇り弥勒に見え決疑を計るものであった。

陸澄の「法論目録」に、王稚遠が弥勒や賢劫千仏を対象

とする定中見仏について鳩摩羅什に問うたことが記録されている。^③ これなどは、道安よりやや後の時代のことであるが、当時、弥勒を対境とする入定見仏が実際に行なわれていたことを端的に物語るものである。道安自ら『三十二相解』^④ 一卷の著述を為したのも亦、弥勒念仏の要求からであったと考えられる。

しからは道安は如何なる經典によってかかる弥勒信仰を得るに到ったのであろうか。もとより道安の時代には『弥勒上生經』は訳出されてはいないが、既に竺法護訳『弥勒成仏經』^① 一卷、同『弥勒本願經』^② 一卷、或云弥勒本願 菩薩所問經 があり、更には失訳の『弥勒經』^⑤ 一卷、長阿含 出や『弥勒当来生經』^⑥ 一卷が存し、弥勒菩薩についてはよく知られていたと考えられる。これらの弥勒經典の外にも弥勒菩薩に關説する經典として支謙訳『了本生死經』^⑦ 一卷や竺法護訳『賢劫經』^⑧ 七卷等々が既に知られており、道安にとって特別に關りの深い『放光經』にも亦、兜率天の弥勒について説いている。それらの經典の中から特に『放光經』^⑨ に道安の弥勒信仰の拠り所を求める説もあるが、恐らく当を得たものではないであろう。むしろ、前述の如く決疑を目的とする道安の弥勒信仰の契機となり、大きな影響を与えた經典としては『弁意經』^⑩ が考えられるであろう。出家して間もない道安

が、師に請うて最初に与えられた經典が『弁意經』であった。^⑪ 彼はこの『弁意經』^⑩ 一卷を師から借り、田舎の労働の休息の間に読み、それを暗誦したという。道安が最初に暗誦した『弁意經』とは、『出三藏記集』卷三の「安公失訳經録」に挙げている『長者弁意經』^⑫ 一卷、旧録云辨 意長者經 を指すものである。^⑬ 現存の元魏法場訳『弁意長者經』^⑭ 一卷はその同本異訳であり、道安が暗誦した經と、その内容はほぼ同じであったと考えられる。その『弁意經』に次のように説いている。

誦^ニ斯經^一者、当^テ為^ニ弥勒^一所^ニ授^レ決^ト也^⑮。

道安がその生涯の最初に暗誦した經のこの一句は必ずや後の道安の弥勒信仰に影響を与えたものと考えられる。

五 結 語

釈道安は確かに弥勒信仰を有していた。しかし、その信仰は後に阿弥陀仏の浄土教と対峙するところの『弥勒上生經』^⑯ にもとづく兜率往生信仰とは全く異質のものである。

現に道安を弥勒信仰に誘った外的要因は、何よりも当時の仏教界の現況にあった。即ち、翻訳された經典は未だその種類は少なく、その訳語は不適當で質量両面で満足すべきものではなかった。しかも經典の講誦に際して生ずる疑問

を誦す師にもめぐまれない。翻訳三蔵をたずね質疑することも、またインドの論師の適切な論書も未だ存しない。經典の理解に不安が残るのは当然である。かくして、当時真摯に法を求める仏教徒は、法門の決疑を人間以上の仏菩薩に求めることとなる。その場合、仏菩薩は過去の釈迦文仏でもなく、未来に下生成道する弥勒仏でもなく、あくまでも現在、兜率天で説法を為す弥勒菩薩である。過去の釈迦仏の教えを継承し、賢劫第五仏としての地位を保証された補処の菩薩で、現在は兜率天に在って恒に説法し、衆生に授決する弥勒こそが道安の信仰の対象となったのである。

仏滅後の末世に、インドから遠く離れて戦乱の絶えない河北地方を流転しながら仏道に邁進した道安には「末世」「辺国」の意識が顕著であった。この意識は兜率天の弥勒菩薩に見えることよってのみ超克することが出来る。しかも、ただひたすら禅観の実修に専念している内はともかく、襄陽に於いて『般若経』の研究、講義に没頭するに到って法門上の疑問の解決は火急の課題となる。決疑のため三昧定に入り、弾指の頃に兜率天に昇り弥勒菩薩に見えんとする信仰は、まさに襄陽時代の道安に必然的に生じたものである。この禅観から般若学へという道安の学問上の経歴が前述したような弥勒念仏を生み出したのである。

このように考察してくるとき、道安の弥勒信仰は、まさに道安が生きた時代の信仰であった。それは後の隋唐時代の弥勒浄土教などとは全く異質のものであり、後の思想信仰の予断をもって先の思想信仰を推し測ることは出来ないのである。

註

① 通常、弥勒経典と呼ばれるものに所謂弥勒六部経がある。

(一)『観弥勒菩薩上生兜率天経』一卷北凉沮渠京声訳 (二)『弥勒下生経』一卷西晋竺法護訳 (三)『弥勒下生成仏経』一卷姚秦鳩摩羅什訳 (四)『弥勒下生成仏経』一卷唐義浄訳 (五)『弥勒大成仏経』一卷姚秦鳩摩羅什訳 (六)『弥勒来时経』一卷失訳。(ともに大正蔵卷十四所収)このうち(一)のいわゆる『弥勒上生経』には「弥勒菩薩放眉間白毫大人相光、与諸天子雨曼陀羅花、来迎此人、此人須臾即得往生」(大正14・四二〇b)など「往生」や「来迎」を説くのに対して、外の(二)～(六)の諸経には兜率天往生や来迎のことは全く説いていない。

② 僧祐撰『出三蔵記集』卷十五「道安法師伝」(大正55・一〇七c)～一〇九b)、慧皎撰『高僧伝』卷五「釈道安伝」(大正50・三五一c)～三五四a)

③ 宝唱撰『名僧伝』を抄写した宗性の『名僧伝抄』の中に「道安伝」(正統蔵二・乙・七所収)がある。後世多くの道安の伝記が著わされるが、それらの資料は『名僧伝』『出三蔵記集』『高僧伝』によるものである。

- ④ 『出三蔵記集』卷十五(大正55・一〇九a)
- ⑤ 『高僧伝』卷五(大正50・三五三b c)
- ⑥ 宗性『名僧伝抄』(正統蔵一三四、新文豊出版公司印行本二頁下)
- ⑦ 『高僧伝』卷五(大正50・三五六c)
- ⑧ 『名僧伝抄』(正統蔵一三四、新文豊出版公司本二二頁下二頁上)
- ⑨ 『名僧伝抄』(正統蔵一三四、新文豊本一五頁)、『高僧伝』卷五(大正50・三五六a)
- ⑩ 『高僧伝』卷五(大正50・三五五b)、なお、宝唱の『名僧伝』第六に「晋江陵上東寺竺僧輔」の伝があったが、宗性は『名僧伝抄』に抄写していない。竺僧輔の生卒年は不明。
- ⑪ 『名僧伝抄』(正統一三四、新文豊本一三頁下)
- ⑫ 『出三蔵記集』卷十五(大正55・一〇九a)、『高僧伝』卷五(大正50・三五三c)、王嘉については『晋書』卷九五王嘉伝を参照。
- ⑬ 『高僧伝』卷五(大正50・三五三c)
- ⑭ 『高僧伝』卷五の道安伝及び『世説新語』卷中之上雅量篇を参照。
- ⑮ 『法苑珠林』卷十六、敬仏篇第六之四感応縁(大正53・四〇六a b)
- ⑯ 横超慧日『中国仏教の研究』第一、五八頁、牧田諦亮「石山寺梁高僧伝とその道安伝校異」(『支那仏教史学二二』)等参照。
- ⑰ 横超慧日「初期中国仏教者の禅観の実態」(『中国仏教初期の翻訳論』(『中国仏教の研究第一』)所収)など参照。
- ⑱ 註⑰参照。
- ⑲ 鎌田茂雄『中国仏教史』第一卷、第五章釈道安。特に「道安の入寂と弥勒信仰」など参照。
- ⑳ 『高僧伝』卷五(大正50・三五六a)
- ㉑ 註⑳に同じ。
- ㉒ 『高僧伝』卷五に「後魏荊州上明寺」(大正50・三五五b)とある。
- ㉓ 『高僧伝』卷五(大正50・三五六b c)、『名僧伝抄』惠精(又名曇戒)伝(正統蔵一三四、新文豊本二二頁)参照。
- ㉔ 檀溪寺建立の年時については諸説ある。符堅が送った弥勒像については『高僧伝』卷五(大正50・三五二b)等参照。
- ㉕ 玉城康四博郎士も亦、道安の弥勒信仰は晩年のことと推定されている(『中国仏教思想の形成』第一卷五〇六頁参照。)しかし、その論拠については賛同することはできない。
- ㉖ 「婆須蜜集経序」、『出三蔵記集』卷十(大正55・七一c)所収。この序文は「未詳作者」となっているが、文中に「余、法和とともに対校修飾し、云々」とあり、その内容から見ても、訳者及び道安の伝記から見ても道安の作であること疑いない。宇井伯寿『釈道安研究』等参照。
- ㉗ 註㉖参照。
- ㉘ 僧叡「毘摩羅詰提経義疏序」、『出三蔵記集』卷八(大正55・五九a)所収。

②⑨ 道安「摩訶鉢羅若波羅蜜經抄序」、『出三藏記集』卷八(大正55・五二b)所収。

③⑩ 『出三藏記集』卷十三の安世高伝に「唯世高出経為群訳之首、安公以為若及面裏不異見聖」(大正55・九五c)とある。

③⑪ 道安「十二門経序」、『出三藏記集』卷六(大正55・四五b~四六a)所収。

③⑫ 道安「道地経序」、『出三藏記集』卷十(大正55・六九c)所収。

③⑬ 道安「道行経序」、『出三藏記集』卷七(大正55・四七a~c)など参照。

③⑭ 『高僧伝』卷五(大正50・三五三b)

③⑮ 道安「婆須蜜集経序」、『出三藏記集』卷十(大正55・七一c)所収。

③⑯ 『高僧伝』卷三(大正50・三三九c)

③⑰ 『高僧伝』卷十一(大正50・三九九a)、また『名僧伝抄』

(二〇頁下)の惠攬伝には「入定見弥勒」と説いている。

③⑱ 『出三藏記集』卷十二(大正55・八三c)

③⑲ 『出三藏記集』卷五、「新集安公注経及雜経志録」(大正55・三九c)。

④⑰ 『出三藏記集』卷二(大正55・八a)

④⑱ 『出三藏記集』卷二(大正55・八b)

④⑲ 『出三藏記集』卷三(大正55・一八a)

④⑲ 『出三藏記集』卷三(大正55・一八b)

④⑲ 『放光般若経』卷二(大正8・七a)、塚本善隆『中国仏教通史』第一卷(五六〇頁)参照。

④⑲ 『出三藏記集』卷十五(大正55・一〇八a)、『高僧伝』卷五(大正50・三五一c)参照。

④⑲ 『出三藏記集』卷三(大正55・一七b)

④⑲ 『弁意長者経』大正14・八四〇b)

(本学講師 仏教学)